

祝島から福島へ 原発のゆくえ

福島原発が爆発——その時、僕は山口県の南東部に浮かぶ島「祝島（いわいしま）」にいました。時々刻々と伝えられる原発の状況に日本中の人たちが注目していた時、島の人たちも同様に、むしろ誰よりも当事者意識を持って見ていたと思います。それは、島の対岸4km弱のところに海を埋め立てて「上関原発」が建てられる計画があり、島の大半の人たちは反対し、「子や孫のためにも海はカネには換えられん」と補償金を受け取らず29年間闘ってきたからです。半農半漁の暮らしからくる自然への感謝の気持ちが、原発に反対する根っこにあるのだと思います。僕は、海の埋め立て工事が始まろうとする頃から福島原発事故までの一年半の間、予定地の田ノ浦や祝島で過ごさせてもらいながら、現地のように写真を写真や映像で発信してきました。幾度となく埋め立てのための巨大な工事船が来て、その度に島の漁師さんたちは仕事の手を休めて抗議に向かいました。福島原発事故の約3週間前、中国電力は約600人を夜中に動員して、埋め立て工事を強行しようとしていました。そして、島の人たちを始め全国から駆け付けた人たちによる抗議行動が数日間繰り広げられました。そんな矢先の福島原発事故でした。上関原発計画は反対世論の高まりから県知事が一時凍結することを決めましたが、事故が起こるまで変わらなかったということは悲しいことです。そして、事故が起こってもなお変わらないのが中国電力。まだ計画を進めると宣言しています。もし、上関原発が建設され、福島原発のような事故が起きた場合、祝島の集落は原発から約4kmで島全体が10km圏内に入るので、直ちに避難が必要ですが、海が時化していたら逃げることもできません。どうするのかと事故の3ヶ月後に中国電力に聞いたところ、まだ考えていないが計画を進めながら自治体と一緒に考えるという答えでした。地震も津波も想定外なら避難も想定していないということでしょう。

「他人事ではない。現地に行ってみよう」ということで祝島の人たちと最初に福島に入ったのは5月でした。その後は一人で通っています。放射線量が高く避難地域となっている飯館村では、パトロールの仕事をしているおじさんたちはマスクもつけず、「もうほとんど飯館の人たちは吸ってるよ。直ちに影響がないなんていい加減な言葉だ。でももう歳だから」とあきらめたように言いました。政府が情報を隠ぺいしたせいでどれだけ多くの人たちが避けられる被曝を強いられたのでしょうか。その後、出会った81歳のおばあちゃんは、生まれてこの方専業農家だったが、それもできなくなり、家族もばらばらになり、「残念でかなわねえなあ」と故郷を奪われた悲しみを漏らしていました。いわき市の久ノ浜の漁師さんは「確率的殺人には加担したくない」として、漁に出ないことが今できることだと苦渋の決断をされています。

地震大国の日本において今回の原発震災はどこでも起こり得るし、このまま原発を進める道を行けば、次の原発震災を招くだろうと思っています。原発に象徴されるような誰かの犠牲の上に成り立つ社会を卒業し、みんなが分かち合い助け合う社会を目指したい。すでに約9割の原発が停まっている！停めれば分かる、分かち合えば足りる！